

麻生区の認知症者向け
民家型デイサービス

介護現場の悲劇断て

高齢者虐待の認定件数が年々、増えている。虐待を生みやすい認知症者の介護現場では「無理のない介護」の模索が続く。川崎市内でも民家型デイサービスで、高齢者と家族の双方のストレスを減らす取り組みも広がっている。

(北条香子)

リポート
かわさき

二〇〇六年四月に高齢者虐待防止法が施行され、市が同年度からまとめている高齢者虐待の認知件数は、初年度の四十五件から、〇七年度には五十八件、〇八年度六十九件と、増加の一途をたどっている。

市高齢者事業推進課では増加の理由として、高齢者数が増え続け、虐待件数も相対的に増えた▽同法の周知が進み、これまで見過ごされていた事実も、介護職員らによって発見されるようになった――などを挙げる。

家族や施設の職員が高齢者をたたいたり、ののしったり、部屋に閉じ込めるなどの事例が報告されており、同課の担当者は「虐待の背景には、介護疲れや家族状況、金銭問題など、さまざまな要因が複雑に絡み合っている」と話す。

介護現場でも高齢者虐待の防止を目指す試みが始まっている。

今月初旬、川崎市麻生区片平でオープンした認知症者向け民家型デイサービス「桃の木亭かたひら」がその一つ。

増加する高齢者虐待 安心と「できること」で防止

社会福祉法人「二広会」が運営する施設で、一九八五年築の木造二階建ての空き家の一階や庭を活用した。

同施設の社会福祉士川内潤さん(こは)は「大きな施設では一日中「早く帰りたい」と落ち着かない利用者もいる。民家型なら、友人の家にお茶を飲みに行くような感覚でリラックスしてもらえ、家族も安心して預けられる」とアピール。最近のことは忘れても、昔のことは細かく覚えていた認知症者に、家族や友人あてに手紙を書いたり、職員に洗濯の仕方を教えたりするプログラムを計画している。

川内さんは「元氣なころにできたことがどんどんできなくなるのが家族にはショックなんです。そんな姿を目の当たりにして感情的になって、つい虐待行為をしてしまふことがある」と指摘。高齢者が「できること」に目を向けた介護が、認知症の進行を抑え、家族の感動にもつながるといふ。

川内さんは「介護ストレスを軽減し、虐待防止につなげたい」と力を込めた。



今月オープンした民家型デイサービス施設で「高齢者虐待を未然に防ぎたい」と話す川内潤さん(麻生区)